

つくしあい運動における本尊論とは

— 本尊論私見 縁を手掛りに —

小山 典 勇

はじめに

つくしあい運動が頓挫した背景を探るために動態調査が行われ、あるいは教化推進を旗印につくしあいの展開策が『智山教化研究』に発表されてきた。筆者もその一翼をかついできた。布教師大会において「つくしあいの理念に基づく教化、教化方針」がうたわれ、あるいは「つくしあい」をテーマに分科会も開かれてきた。また教化講習所のカリキュラムは「つくしあい」が柱となっている。小冊子『生きる力』にも「つくしあい」が用いられている。教化研究室は、智山教化研究所の業務を引き継いで、以上のような編集・研修に関わってきたのである。

しかし、このような各方面からの働きかけにもかかわらず、運動として進んだのか、どのような成果が上がったのか、という問いかけには答えにくい部分がある。それは、後述することであるが、「運動という用語は使用しない」、しかし「教化理念としては重要である」という曖昧な決着があるからである。つくしあい運動は当初から動いていないのである。だから「つくしあい運動とは何か」と問われても答えようがない。

しかし、「教化理念としてのつくしあい」は、言葉の上では講習や出版物に登場するし、また宝号は檀信徒に定着してきてもいる。この意味では全く何もなかったのではない。したがって「つくしあい」について、その存在や評価は「人によってまちまち」なのである。

このような曖昧な状況から抜け出すために、つくしあい運動が何故進まなかったのか、問題はどこにあったのか、そのことを重視して検証する必要があると提案された。これまでとは逆転した発想から平成五年度に「つくしあい運動を検証する研究会」が始まった。検証作業の一つである組織面・運動面は片野真省氏が『現代密教』8号に発表したとおりである。

本稿は、内容面について「つくしあい運動の理念、特に本尊論の問題」を中心に討議し、検証してきたものであるが、私見でもある。

問題の所在

「つくしあい運動における本尊論の問題」とはどういう問題なのかといえ、本尊を大日如来に統一しようとしたために、大日如来を本尊としない各寺院から疑問が出されたという問題である。

本稿では本尊論を検証するとともに「縁」をキーワードに私見を述べておきたい。

筆者が本稿で検証する範囲は次のようである。

- 1 運動の実施策
- 2 つくしあい運動に関する疑義
- 3 本尊論の問題とは

4 本尊論の問題はどのように検討されたか

5 信仰運動、教養学習運動となる理念となるものだったのか

6 まとめにかえて

本尊論私見

1 運動の実施策

何故、大日如来に統一しようとしたのか、これについては次のようである。

「二本化した宗団的教化事業を遂行するためには、宗本一体、本山為本が具現されなければならない。この種の宗教運動は、教学の布教伝道に止まることなく、宗教的行動の拡大運動であるので、それにはまず礼拝対象に対する意識を統一して、同信同行の実を挙げることである。従ってつくしあいという大日如来信仰運動を宗団的に遂行するためには、始めに総本山における本尊大日如来の造頭がなくてはならないのである。密教徒の諸尊信仰はそのまま大日如来の信仰である。そして来(↓末)寺各々の本尊は各尊であるから、智積院はその本尊を法身大日如来としなければ、三千末寺の総本山としての機能はないのである」↑岡田昌道「つくしあいへの道」《宗報二七三号、昭和四八年四月号 p 16》

さらに次のようにいわれる。

「金堂建立のためのつくしあい運動ではない。つくしあい運動を遂行するための金堂建立である。↑右同《宗報同、p 17》」

岡田昌道師の説明にしたがえば、

①一本化した宗団教化事業を推進するため、②宗団と本山が一体であり、しかも本山を中心とするため、③宗教運動のあり方は、教学の布教に終わるのではなく宗教的行動の拡大運動をするため、という三目的を満たすためには、大日如来信仰をかがげ、総本山に大日如来を造願することが必要なのである。

このことが可能な理由は、(真言)密教の考え方には「諸尊信仰はすなわち大日如来信仰」があるからである。もしそうでなければ、智積院は総本山として機能しないことになる。

このような意識を宗団全体に浸透する事業として、総本山に金堂および大日如来が造願される「されるべきな」のだ、と目的と意義が明らかにされている。

意図することは、大日如来信仰に止まらず、総本山の高揚をたかめ、宗団全体のあり方を検討するものであった。

「↑総本山は総菩提所、総祈願所とうたわれる」

また

「昭和四十九年は、金堂建立に宗運をかける年で、すべての力をそこに結集していかなければならない」(宗報二八六号、昭和四十九年五月号p2)

とも意気込みが吐露されている。しかしである。

2 つくしあい運動に関する疑義

つくしあい運動提起者の狙いとは裏腹に、次のような疑問が生じた。

昭和四十八年、内局はつくしあい運動の具体的展開策として教化規程制定案を制度調査委員会に諮った。その規程については「賛意が示された」が、「疑義がだされた」という。

①つくしあい運動は、代表会で審議議決されていないので、本宗における正統の伝法方法とすることの疑義。

②本宗において重要な地位にある著宿の中につくしあい運動に反対を表明をする人がいる。

そこで、公聴会が開かれ、その見解は、

①「本宗においては、一つの型をもった宗团的規模の宗教運動を展開することは時期尚早か或いは不可能かである。」

と否定的であった。そこで

②「それなら尚更のこと、宗団を形成している以上宗团的教化の方策を引き続いて研究していかなければならぬ。」

という研究課題が浮上した。提案された「つくしあい運動」については、

①「つくしあい運動」の用語を宗团的教化としては使わない。

②つくしあいの理念（理念といっても新しく創り出されたということではなく、真言教義の教化的表現の意である）に納得し賛成する教師には教化の場は大いに活用していただく。

③今後の宗团的規模の教化活動としての各教区における教化会議に対し、当局としてはつくしあいの理念をもってその指導理念とする

以上の三点が結論的に認められた。↑岡田昌道「これからの宗団布教々々の方向（一）——布教教化上の諸問題をふまえて」《宗報》二八六号、昭和四九年五月号p2》

なお、残された問題点として

「教学的に疑問はないが、実践の段階に於てさしさわりがあるという本尊論に関しては引続き研究をつづける」

↑岡田昌道「これからの宗団布教教化の方向(三)」《宗報二八八号、昭和四九年七月号p8》

また

「宗団の規模の教化の実践は当局からの一方的押しつけであってはならない(つくしあい運動の場合は、まだ実践の段階ではなく、説明の段階であった)から教化会議という最も民主的あり方で進めるのである……↑岡田「これからの宗団布教教化の方向(三)」《宗報右同、p8》

と、内容理解のために性急さに陥らないことを自戒している。

3 本尊論の問題とは

教学的には疑問はないが、実践の段階に於てさしさわりがあるという本尊論とはどういう問題だろうか。

檀信徒「真言宗の本尊さまは何ですか」

住 職「大日如来といいます」

檀信徒「うちのお寺は何ですか」

住 職「お不動さま」

檀信徒「エッ、うちの宗派は真言宗なのに、大日如来ではないんですか」

住 職「」

という問題が起こり得るということにあった。これが「実践の段階に於てさしさわりがある」という事情である(後述)。各寺院の本尊にはそれぞれの歴史と伝統があり、住職も檀信徒も地域の人々もそれを信仰してきた。同じ真言宗でも菩提寺は不動、となりの寺院は観音という違いはあっても、菩提寺の本尊に疑問はなかった。ところがある日

突然、今までの本尊ではなく「大日如来」が本尊として出現した。顔見知りの知人の前に、異邦人が訪れ、自分が本物だというのでは、驚き、ためらうばかりであろう。

急遽、本宗寺院の本尊について調査が行われた。多い順にあげれば、

不動明王・四五三カ寺（以下は略）、22%。大日如来・四三八、22%。観世音菩薩・三一、16%。阿弥陀如来・二六二、13%。薬師如来・二一〇、11%。地藏菩薩・一四六、7%。釈迦如来・二二、虚空蔵菩薩・二一、文殊菩薩・九、毘沙門天・九、愛染明王・七、弥勒菩薩・四、普賢菩薩・三、聖徳太子・三、弁財天・二、大黒天・二、五智如来・二、その他に孔雀明王、威徳明王、摩利支天、十三仏。

本宗寺院の本尊の傾向は、不動、大日、観音、阿弥陀、薬師そして地藏が大勢である。↑『智山教化研究』8号、昭和五十一年（昭和四十九年実施）p100。（ちなみにリーフレット・本尊シリーズは、この数値を参考にしてている）

本宗には、本尊が大日如来ではない寺院が八割ある。八割の寺院にとって急に本尊が代わるとしたらどうだろうか。例えば、創価学会に入信する場合は、先祖代々の位牌や仏壇を焼却することから始まると聞いたことがあるが、住職や檀信徒には、それに匹敵する難題である。それも自分が希望したことならともかくである。新しく、信仰運動を進めようとする場合には、これくらいの激しさや熱意がなければならぬのかもしれないが、教学の帰結として、また檀信徒の心情として、それだけの過激さを求めているのだろうか。

一方において、真言宗には本尊に対する独特の考えがあることが知られている。だからこそ同じ真言宗の寺院なのに、不動、観音から地藏までさまざまな仏が本尊として迎えられているのであり、それが真言宗の特性であろう。ちなみに本尊論で云々ということは、浄土宗においてはありえない。本尊が阿弥陀仏を離れてはありえない。禅宗においては座禅を通じて無心・無我の境地を体得していくことであるから、そのモデルとして釈尊が本尊となるだろう。

日蓮・法華系では曼荼羅を本尊とするが、真言宗のような総徳・別徳の問題はおこっていない。いずれの宗派においても、寺院の歴史的経緯でいろいろな仏菩薩がまつられていても、教学上から寺院の本尊が多様である理由はないのである。皮肉なことに「つくしあい運動」が注目されたことは、この本尊の問題だけである。

信仰運動において本尊論に問題があることは次のように指摘されている。

「やや遅れて展開された密教系の教団では、浄土教における阿弥陀仏一仏の純粹信仰運動を展開する以前の問題として、本尊統一の課題があったといえる」↑藤井正雄著『現代人の信仰構造―宗教浮動人口の行動と思想』評論社、昭和四九年、p 86)

4 本尊論の問題はどのように検討されたか

本尊論について検討を誰がしたか、その解明のために、運動を進めた当事者として①福田亮成師、②真保龍敵師の発言を紹介してみよう。

①福田亮成「本宗本尊論の徹底をはかる教化カリキュラム」(『智山教化研究No.10、昭和五三年』)。

つくしあい運動について、「再検討推進論者」が指摘する問題点として六点が指摘されている。その第三に本尊論が再検討事項になっている。

「三、本尊論の再検討、即ち諸尊信仰がいかされていないということp 59」を紹介し、第一、本尊論ということ、第三、つくしあい運動における本尊論の二項に考察している。

本尊が問題になる経緯について「第一、本尊論ということ」において、次のようにいう。

「本尊論という問題は、具体的には、『つくしあい運動』が論議されていた当初、法身大日如来を“大なるいのち”

と云いかえることについて疑問が提出された。さらに、大日如来像掛軸製作にまつわり、大日如来以外の諸尊を本尊としている寺院において疑義が発せられたに始まったのである。p 59」

次に、教師がかかわる本尊として

「一、教義上の総徳たる本尊大日如来。二、両界曼荼羅を本尊とする場合。三、諸尊、即ち投華得仏の仏、現在は「諸尊皆同大日如来」と云って大日如来に帰一される。ある場合には念持仏としての本尊。四、住職せる寺院の本尊。五、弘法大師。即ち南無大師遍照金剛としての弘法大師。六、伝統血脈上の八祖等であらう。p 59「60」

さらに『宗法』第四条（本尊及び祖師）を引用し、本宗における本尊の規定を考察する。それによると「本宗は、大日如来を総徳の本尊、両部曼荼羅界会の諸尊を別徳の本尊とする。p 60」となっている。

これらを勘案して、

『宗法』には、選択された本尊の定めはなく、総徳の大日如来、別徳の曼荼羅界会の諸尊を本尊とする、ときわめてゆるやかに定めていることにとどまる。p 60」

このようなゆるやかな規程の背景や理由について

「これは、真言密教々義が持つところの法身観、曼荼羅観によるもので、大日如来の当体は、諸尊の一つ一つの徳に具現されている」と指摘し、仏教史における諸仏諸菩薩の位置づけをたどり、弘法大師の考えをのべる。

「端的に云って統一原理としての大日如来観から一歩進めて活動原理としての大日如来観を完成したことは注意すべきであらう。p 60」

「ようするに、真言宗の本尊は、立体的であり、かつ活動的である広大なる風光を指し示すものであると云うことである。」

弘法大師の本尊論としては

「自身が本尊となつてゆく本尊論、即ち“なる”という活動的な本尊論であることである。p 61」

「ここで云う本尊論とは、従来のごときいわゆる本尊について、その構造上の諸問題を述べるものではない。真言教義上での本尊論とは、そのもつ教義全体にわたるものであり、単に総徳・別徳の大日如来と諸尊との関係や、その信仰上の諸問題に限定すべきではないということである。p 63」

この指摘は二つの意味で重要である。

その一は、本尊論とは教義全体にわたるものであるということ、それは、総徳であるとか別徳であるとかを論じている限り、言葉の遊びとなり、曼荼羅思想がジグソーパズルのように構造の問題・仕組みだけの問題として考えてしまふからである。第二は、「なる」という指摘である。

それならば、教義上の問題としてはどのように理解するかについて

「教義上からは、総徳としての大日、別徳としての観音は、観音菩薩の誓願は大日如来によってうらづけられ、大日如来は観音という誓願として現れた、ということである」

このような理解の仕方には、疑問が生じることも予想して、

「一、観音信仰を通して大日如来までの信仰まで導いているだろうか。二、大日如来を強調することは、諸尊信仰を否定することにならないか。即ち、大日如来を諸尊におとしめてはいないか」

の留意点をあげている。

さらに、本尊の問題は、昨今の問題ではなく明治・大正期にも問題視され、数々の論稿が発表されたことの一部を紹介して終わる。まとめとして、住職の姿勢、問題として、次のように結んでいる。

「特に強調したいことは、「つくしあい運動」における本尊論の問題は、教学々習に移行するものである、ということである。即ち、本尊になってゆく、という実践の本尊論の仕方が唯一のそれであると考えられる。p 64」

②真保龍敞「信条・誓いおよび勤行式を中心とする教化カリキュラム」(『智山教化研究』No.10、昭和五三年)つくしあい運動の問題点が早い段階で推測されていたことが分かる論稿である。

「反省点の第二は、本尊論の再検討がなかり叫ばれている。この点については、宗団的規模での教化推進は、どうしても総別の上の総徳の法身大日如來の境位に集約して行われるのは当然で、末寺の諸尊の特質、別徳についての配慮が手薄であったことは否めないであろう。しかし、これはむしろ教師僧侶の大師教学了解の程度の乏しさを、むしろ逆に物語ってしまふこととなるのである。p 51」

「諸尊の別徳こそ、法身如來の万徳の徳相であるから、法身如來に直参して、その腹で、自坊の本尊の威徳を教化宣布することが、本筋とならねばならない。p 51」

真保師には厳しい口調になるが「教師僧侶の大師教学了解の程度の乏しき」という発言は短絡的ではないだろうか。問題は総徳・別徳の問題ではないはずだ。菩提寺・檀信徒が何を接点に結ばれているのか、いわゆる「檀信徒—菩提寺」という構図を問題にし「家の宗旨から個人の信仰へ」が目指されたことではないのだろうか。

本尊とはいったいどのように考えればいいのか、また規定できるのだろうか。この点について

真保龍敞『生きる力—智山勤行式』p 194

本尊を規定して、

「『本尊さまは、私たちの帰依するいのちのよりどころです』
具体的には、

「具体的には、ご本尊さまは、総本山智積院金堂の『大日如来さま』であり、あなたの菩提寺のご本尊さまであり、あなたの家のお仏壇のご本尊さまです」

「あなたが特に結縁されていればそのご縁を結んだみ仏が、あなたのご本尊さまです」

筆者流に理解すれば、本尊とは「いのちのよりどころ」であり、それは現象的には総本山・各寺院・自宅の仏壇にまつられている。それらの数ある仏と「縁を結んだ仏こそが本尊である」。回りくどくなったが、檀信徒には菩提寺の本尊でいいということではないか。たまたま不動とか観音の違いはあるだけなのである。総徳・別徳は集団（宗団）の構成員に帰属意識をもたせる説明に過ぎないのではないか。

「もっと手前には、私たちのいのちの中には、実は、ご本尊さまがもともと、おまつりされてあるのです。この自分のいのちの中のみ仏を、もしみつけることができたら、どんなに素晴らしいことでしょう」

「共ににご本尊さまに帰依する人々の輪が、世界いっぱいになり満ちあふれた時、ご本尊さまのいのちの中に、つくしあう悟りのマンダラ世界が現出されます」

本尊は外に求めるものではなく、自分の中に見いだすべき性質のものである。それは万人に共通する普遍的なものでもある。しかし「もともとおまつりされてある」「いのちの中のみ仏」「もしみつけることができたら」という説明では、自分の中に見いだすプロセスが具体的に段階的に提示されているといえるだろうか。つまり「本尊」とは何か。「マンダラの世界」とは何か、ご本尊さまとマンダラの世界はどういう関係なのかなどなどに疑問が起り、また短い文脈の中にちりばめられた用語から「つくしあい運動」の構図が見えてくるだろうか。運動の起点となる動機は何だろうか。

5 信仰運動、教養学習運動の理念となるものだったのか

つくしあい運動には、当初から「運動」という用語にアレルギーが示され、また「何故、大日如来なのか」というクレームがついたまま動き出した。いわば見切り発車だ。表面的には「運動」「本尊云々」が問題視されたが、本質的な問題は「これからの宗団のあり方」にあったはずである。特に「総本山をどうもりあげるか、このままで総本山は大丈夫か」が問題であったと思われる。いいかえると総本山と各寺院とに隔たりがあるという危機感であろう。

どこからこのような危機意識が生まれたのだろうか。推測の一つには宗教法人法の施行である。宗教法人法はそれぞれの宗教法人の独立性・自立性を重んじる。個々の宗教法人の集団が智山宗団であるから、宗教上の総本山よりも制度上の真言宗智山派の動向に関心が集まる。総本山は末寺を支配する権力を失い「権威」のみとなった。したがって宗教法人法は、宗団の民主的な運営・自治に道を開いたが、宗団離脱にもつながる両刃の剣でもある。総本山をどうするかという問題は、宗教法人法を待つまでもなく明治維新にまでさかのぼる。すなわち維新政府の宗教政策により、伝統教団は宗教的・経済的打撃を受けるが、一番打撃をうけたものは各宗の総・大本山である。総本山・智積院は檀信徒と直接結びついている門徒宗とは違い、宗派の別なく参詣する高野山とも違い、自主・独立できる寺院ではなかった。したがって智山派の歴史の内局には、総本山の位置づけ・経済的基盤作りが課題であり、腐心することであった。

このような背景を踏まえれば、(一)各寺院においては檀信徒の信仰を養い、(二)総本山においては総本山の基礎を築くという一挙両得を目指す必要が生じていたことが分かる。それが「金堂建立」を契機に「つくしあい運動」として表面化したという推測もなりたつのではなからうか。

「つくしあい運動」は、運動ではなく、岡田師の言葉にもあるように「教学学習」であったのである。しかし、教學学習であるならば、諸尊信仰と大日如来との関係は、歴史的には逆ではないのか。歴史的には諸尊信仰を集約する存在として登場する。このことは胎藏曼荼羅の中台八葉院を思い浮かべればよい。四方（八方）には仏教史で既に存在が知られ活動してきた四仏（四菩薩）が位置する。その中央に一步遅れて登場する大日如来が座す。大日は如来と尊称されるが、その姿は菩薩形である。したがって大日の性格は如来であり菩薩である。涅槃の境地と現世の利他行とを一身に引き受けているのである。この両義性が特徴であろう。

このことは、原理・原則でいえば、四方が個別的な問題・特殊・各論を意味し、中央が総合的な問題・普遍・総論を表すといえるだろう。

たしかに大日如来はこのような性質をそなえていた。しかし、現実的・実地的な運動を志し、問題提起をするだけの状況把握ができていたのだろうか。本宗の現状を見渡せば、それぞれの地域に伝統や歴史がある。それを無視するような理念が提示され、教義上・理論的には正しいから協力をといても、押し付けとしか受け止められないだろう。それぞれの言い分・立場があるのだから。そのためには始めにお互いの共通基盤となる、あるいは努力目標となる土俵作りをする必要がある。それもそれぞれの言い分・立場に共通する問題すなわち極めて身近な問題をテーマとする必要があったと思われる。前述の曼荼羅でいえば四方の四仏のレベルを上回るレベルを大日が果たすというみである。このことは福田師がいう「観音信仰から大日へ高める」という考えに同調する点である。教えを学習していくというプロセスではなく、目の前の問題をどのように解決していくかというプロセスが重視されるべきではないだろうか。

例えていえば、自動車の整備士ではなくても（教えを知らなくても）、自動車を運転できる（生活していける）。自

動車を走らせるには、エンジンやブレーキ装置などを始めに理解すべきではなく、エンジンが始動しない場合はすなわちその問題は、このように解決するというような個別的な問題から学習していくべきではないか。

このような仮説を是とすれば、現代社会の諸問題について真言密教はどのように対応するか、あるいは現代はどのような問題をはらんでいるかという問題提起から始めるべきだろう。ただしそれは「運動」といえるものではないだろう。その問題を多角的に分析し、身近に取り組める内容・実践できる取り組みとすれば、「運動」も可能ではないだろう。例えば、先年、難民救済の支援策として「毛布」を発送したことがある。むしろ運動などといわないで、智山派のキャンペーンとして行う程度でよいのではないだろうか。あるいは「愛は地球を救う」民放のキャンペーンが毎年の行事となっているが、それも参考事例の一つである。

さらにどうしても「教化運動」とするなら、成果はともかくも、内局あるいは別組織として頑強に推し進めるだけである。真言宗豊山派の開け心の曼荼羅、光明運動の延長にある雑誌『光明』は大いに親しまれ、天台宗の「一隅を照らす運動」は各地で各種の大会が開かれているように、ひたすらに取り組むだけである。

次に教化運動の目的はどこにあるか、それを確認する必要があるだろう。

教学を学習しながら寺院・教団の体質改善を図るのか、問題はあるにしても寺院を存続させるために寺院の機能・役割を支援していくかである。これはかつて教化運動とは「寺を強くする運動」を検証することでもある。

東・西の浄土真宗の教化運動について、次の指摘に注目すべきだろう。

「既成仏教の中では、浄土真宗だけが現代的教団として活躍している・・」〔東本願寺の急進性より、西本願寺の地味な布教努力をより評価している。理由は……新しい《实践教学》が本願寺派に展開している。p14〕

「東本願寺は清沢満之から金子大栄に至る教学に強い自信と自意識があったが故に、初めから教学を中心にして復

興運動だという形を打ちだした。……自意識の強さから争いを生むことになる」――「東本願寺の問題点は、法主という天皇的存在（本願寺住職・管長・法人代表者という三位一体の絶対権力）を抱え込んでいる事実にあった。p15」
↑井門富二夫「教団改革の社会学」〔『国際宗教ニュース』一六卷、第1・2号、昭和五二年一〇月〕

大日如来に統一した教学運動とするには、予想しえる教学上の問題があったことが第一のつまずきであり、寺を強くするには（後に『これからの寺院行事』が発行されたが）理念に止まり具体策が提示できないままに過ぎ去ったことは否めないだろう。

しかし、つくしあい運動、つくいあいの教化理念という定義を別にすれば、この二十年にわたる本宗の歩みには成果もあるのである。

それは「南無大師遍照金剛」と唱えるご宝号である。総合調査によれば周知度は七割である。教化運動、信仰運動の是非を問わなければ、ご宝号をポイントに寺院作り・檀信徒の信仰育成が図られてきた成果である。大学を出て経験の浅い住職が「宝号唱和」を手掛かりとして教化活動への展開が始まるものと位置づけられるべきである。寺院の主な義務である葬儀、法事で「ご宝号」を唱え、冥福を祈る実践としていくことも可能である。祈りから宗教の門が開けるからである。

なお、どうしても総本山・智積院をテーマとしなければならないのであったから、総本山参拝や団参のあり方が研修会の話題となってきた。お手次ぎ運動は、浄土宗の総本山・知恩院の運動であるとして引き合いに出されるが、本宗において目覚ましい成果が上がっているとはいえない。総本山には総菩提所・総祈願所という位置づけが発表されているが、菩提・祈願のより所となる法流という宗教性に着目すべきだろう。宝号については、帰属意識の啓発と述べたように智山派の一員という意識の啓発を最優先し、結果として総本山に眼が開いていくというプロセスになるの

ではないか。菩提寺の住職が修行する道場として、檀信徒にPRしていく必要もあるだろう。

以上の二項目は、簡単に考えれば「祈りましょう」「総本山にお参りしましょう」という掛け声・キャンペーンのようである。ただし、それは「つくしあい」のように「教学の現代的表現である」「教化理念」というような舞い上がったものではない。祈る・唱えるを起点に実践生活に展開する一過程として総本山が見えてくるという程度である。ところで「宝号唱和」については「南無阿弥陀仏」や「南無妙法蓮華経」とどこが違うかという疑問もおこるだろうし、よそ様のまね事をさせるのかという反論もあるだろう。その疑問に取り組んでいくことが自分の教学ができるうえで必要ではないのだろうか。つきつめていえば、誰もが葬式には参列し、また自分も死んで行く身の上なのだから、ご宝号は死者のために祈り、自分の成仏を願って唱えられるものである。この切実な意味を見落としてはならないと考える。

6 まとめにかえて

教化あるいは布教であれ伝道であれ、問題を含む用語である。その理由は、教化といえば、すでに教えがあり、教えを待ち望む檀信徒という対象がいる。したがって、住職は引き出しから教えを取り出せばよいと考えるからである。

これが新宗教であれば、住職は創立者として指導者として様々な発言や活動をする。それに賛同し支援する人によって教団から形成され、そして教団の方向が定まっていく。我々の伝統教団は、上述の創始者である弘法大師や興教大師から時代も社会も遠く隔たってしまったている。時代や社会には取り組むべき課題がある。その課題に取り組むことが教団の歴史だということもできるだろう。このように考えれば、教えが先にあるのではなく、現代の取り組む

べき課題は何かから始まる。智山伝法院が先に発行した「真言教学と社会問題シリーズ」はその好例である。ページの制約もあって総花的であり、さらに教区講習会などで取り上げられていないという弱点も解消されていない。これは同問題についてもいえることである。さらに総合調査にしたがえば、教化推進には地域差・経済的格差・人材問題という大問題がある。

これらを勘案すれば、まず人材作りが宗団の緊急にして最大の課題である。基礎教育から住職研修に至るまで教育・研修制度の検討が必要である（この点は片野師、前掲書参照）。

その教育・研修の柱は、教化をどう考えるかである。それぞれが自分の目的意識をもち、取り組んで行くプログラム作り・仲間作り、あるいは広報および伝達度・理解度を探る方法、あるいは他の宗教・伝統教団の動向など、を内容とする教化研修のあり方が研究課題とされてよいと思われる。それはいわゆる教化学とも住職学とも呼ばれるものに相当する。

「つくしあい」は教化理念ではなく教学原理に相当するものであった。本尊の問題と「つくしあい」という考えとが整合性をもって論じられているとはいえない。つくしあいⅡ相互供養、本尊論Ⅱ自分と大日、この二つの課題の前で説明に追われている感がするのは筆者だけであろうか。しかしながら、つくしあいの背景にある「相互供養・礼拝」さらにそれを支える真言密教の世界観を展望するなら、「つくしあい教学」の論評は筆者の任ではない。しかし何故はじめから「相互供養」でなければならなかったのか、筆者には疑問であり不明である。筆者には「つくしあいの理念」に代わる新しい「理念」を考える意図は全くなかった。その理由は明治維新期における「安心論争」にある。キリスト教が解禁され、寺院の土地が取り上げられ、伝統教団は宗教的に経済的に新局面を迎えることになった。このときに真言宗では、何を真言宗の基本とするかに関心が集まり、さまざまな基本的考え方すなわち安心論が

提案された。だれもが自説を主張して論陣を張ったが論争に終わり、結果は檀信徒に定着する前に瓦解してしまったのである。「つくしあい」を別の表現に置き換えても、教学から相互供養ではなく別の考えを持ち出してきても、問題は解決しないだろうという寂しさがあった。つまり我々の目の前を問題に取り組んでいくという個々別々の真摯な取り組みが、点が面となるように広がり、先輩から後輩へと継統されて行くようであれば、ならないだろうと考えた次第である。それは大乘仏教のさまざまな經典がさまざまな主題を掲げているようにである。

本尊論私見 縁を手掛かりに

住職には本尊は自坊の本尊として余りにも親しい存在であるが、檀信徒にとって本尊とは何だろうか。

そもそも本尊とはどういう意味だろうか。本尊という用語は『大日経疏』などで、また修法における次第に現れるから、その法要儀礼の中心的な役割をはたす主尊を示すものである。したがって筆者は本尊とは、「本来最も尊い存在」と考えている。個人的に大事なものの・尊いものではなく、誰にも身近に求められしかも共通する普遍的な存在という意味で考えておきたい。渡辺照宏師はインド文献から「イシュタ・デーヴァター」すなわち「行者がまつる神格」としている（『智山教化研究』八号参照）。

本尊とは何か、それは自分である。そこで自分とは何かが問題となる。くどくどしく考えを進めると、我々の回りには「自分と見誤る・錯覚する存在」が多々ある。このことを留意点として人々・檀信徒の意識を考察してみよう。

檀信徒の意識からすれば、菩提寺にお参りして一番大事なものは何かといえば、先祖のことだろう。自分と血縁があるからである。智山派寺院の伝統行事は先祖を主題とするものが多い。江戸時代に徳川幕府の宗教政策により葬儀・法事を余儀なくされ、以来三百年にわたり、多くの寺院は葬儀・法事を寺院の顔としてきた。ふだんはお寺から離

れていても、家族が死ねばお寺を頼りとする、これは徳川政権が残した教育の結果である。だから先祖が大事なのだろうか。先祖を支える行事が多いということはそれだけではないはずだ。先祖の問題はそのような教育だけで檀信徒が受け入れてきたとは思われない。むしろ自分の身体の中を駆け巡る命のルーツが問題なのである。お盆はその命のルーツに触れるチャンスである。国民的行事ともなってきたお盆は、都市から古里へ帰る、人々や自然が出会うシーンである。そこでは帰る人も迎える人も、命の出会いと受け止めているはずである。それは自分の身体を流れる血と同じ血をもつもの同士の気持ちである。その意識は過去へさかのぼれば、父母・祖父母・祖先へとつながる。また未来を見渡せば、子へ孫へとつながっていきたいと願う心理である。(↑加地伸行著『儒教とは何か』中公新書九八、P9参照)

この素朴な心情を根底に、家族・親族の関係また地域共同体のあり方が規制され、規定され、菩提寺と檀家の関係も築かれてきたのである。菩提寺は血縁により、神社は地縁で。さらに人々は恵方参り、節分などでは各地の神社仏閣に仏縁をもとめて現世の平安を願ってきたのである。

自分に代わる大事な存在は血縁である。武士の立場であれば、お家が存続するのであるなら、すなわち血縁が存続するのであるなら、自分が死ぬことも辞さないという意識を思えばいいだろう。江戸時代には人々は菩提寺をもちながら、また救いを説く流行神に走ったという心情は、今日的にいえば、家の宗旨と個人の信仰という使い分けの心情に通じるだろう。

死者を「ほとけ」と呼ぶ意識はどうだろうか。檀信徒にとっては、亡者は住職の引導により「ほとけ」の世界へ旅立っていくものである。菩提寺の「ほとけ」すなわち「本尊さまと亡者は一体の存在として理解されているのではないか。あえて用語を使い分ければ、先祖さま・本尊さまということであろう。

第二には、死者を美化するという心情が親族にはある。死亡者が政敵など敵対する関係であれば、敵対者の「怨念」を静める祈りが捧げられる。このケースでも死者を絶対視する気持ちが働いている。したがって死者が「ほとけ」という絶対的な存在になりえる条件は整っているのである。

筆者が問題視する点は、檀信徒にとって死者⇨先祖⇨ほとけ・本尊という理解を間違いだというのではなく、この意識のずれを認めたらうで、ずれをどのように方向づけをするか、である。このことが本尊論を考察するポイントであるということである。

ところで本尊⇨自分⇨自分にとって大事な存在と置き換え、その一例として自分の命⇨親族⇨血縁⇨祖先を見たのであるが、このように自分の大事な存在は一義的には外に求められるが、人間の心理はこだけ止まらないことは『十住心論』に明らかかなように、内面に向けられていくものである。

「南無大師遍照金剛」は、現在では真言宗を思い起こさせるキーワードとなったことは述べた。この南無大師遍照金剛のアイデアのポイントは、大師で空海という歴史的存在を、遍照で大日如来という普遍的な存在で表現した点である。つまり歴史上の空海をたどり真言密教の世界へ入り、真言密教の世界を空海を通じてたどるという点である。釈尊が入滅した後には「法」のみが頼りであったが、人々は菩提樹・仏足（跡・石）・法論を釈尊（の身代わり）として礼拝したという。ここでも人間・事物を通じて悟りの境地を求めていることが分かる。

ところで、本尊と先祖が近い関係にある考えの一例として、儒教の五常と仏教の五戒とがある。この問題は空海・弘法大師が『三教指帰』で執拗に問題視した点でもある。一般には五常、五戒は倫理の問題とされているが、五常として現れる世界観、五戒として現れる世界観の同異の問題として検討するとどうなるだろうか。筆者が指摘することは五常と五戒の項目を比較することではない。世間一般の人々にとっては、宗教的立場の違いは問題ではないという

ことである。必要ならば、仏教であれ儒教であれ、それを受け入れるという意識である。

自分にとって一番大事な存在は、自分に置き換えられる存在であることはいうまでもないだろう。おおげさな表現をすれば自分の（生理的な）生命と引き換えにできるものである。名譽、名声、社会的な立場が思い浮かんでくるが、結局は自分の「生き方の根本となるもの」といえるだろう。人柄・人徳・人間性などは葬儀の諷誦文でしばしば聞かれる言葉である。「生き方の根本となるもの」として真言密教の用語でいえば菩提心を想定する。菩提心は勤行式で常に唱えることである。菩提心がおれば次は三昧耶戒の真言が伴うはずである。

紙数の関係で結論的にいえば、菩提心を起点として菩提心を開花していく営みの諸相を本尊論と考えているところである。このことは自分学として後日検討したいと考えている。